

## 「八丈志」について

On "Hachizyo - si"

板 坂 耀 子

Yoko Itasaka

(国際共生教育講座)

(平成十五年九月十日受理)

### 一 書誌

大原正矩「八丈誌」は、「国書総目録」によると、国会図書館・内閣文庫・国文学資料館・都立中央図書館・岩瀬文庫・無窮会神習文庫に写本が残っていることになっている。私は史料館以外のすべての本を見たが、実際には数点が各所に存在していたりして、計十点を見たことになる。その概略を以下に述べよう。

①内閣文庫一七三—一五四。写本二冊。青色表紙、左肩子持ち梓白題箋。外題「八丈志 上(下)」。内題「八丈志」。二三・五×一五・四cm。九行書。上冊五九丁、下冊六七丁。奥書「右者更科舎の蔵書、天保四癸巳年仲秋中旬写之」。彩色図多し。

②内閣文庫一七三—一七三。写本四冊。菊花地模様茶色表紙、左肩白題

箋。外題「八丈誌 上乾(上坤)(中)(下)」。内題「八丈誌 巻之上乾」。二五・八×一八・五cm。「浅草文庫」等朱印。九行書。第一冊三八丁、第二冊三五丁、第三冊三二丁(彩色図収録)、第四冊四〇丁(同上)。奥書なし。「罪人ニ多ク此疾アリ」で終わる。

③内閣文庫一七三—一三二。写本五冊。紺色の椿花模様入り黄色表紙。左肩白題箋。外題「八丈誌 一(二)五」。内題なし。二四・三×一六・五cm。一二行書。第一冊三〇丁、第二冊九丁(内題「八丈物語」、第三冊一五丁、第四冊一六丁(内題「八丈誌」。「伊豆国」で始まり、「く船の来る事稀なり」で終わる)、第五冊一〇丁(末尾に「八丈島高札」を付す)。朱あり。彩色図多し。奥書「天保六乙未年四月写之。淵静堂」

④内閣文庫一七三—一六四。写本二冊。薄茶色表紙、左肩白題箋。外題

「八丈誌 上(中下)」。内題「八丈誌 卷之上乾」。二五・五×一九・二cm。九行書。第一冊七四丁(墨付七二丁)、第二冊七五丁。「伊豆国」で始まり、「此疾アリ」で終る。第二冊には彩色図多し。奥書「八丈誌二本明治八年十二月二日校正 中邨元起」。

⑤内閣文庫一七三―一六七。写本一冊。薄茶色表紙、左肩子持ち梓白題箋。外題「八丈志 八丈嶋記 完」。中表紙題「八丈志 八丈嶋記」。二五・七×一九・一cm。七行書。一二四丁。彩色図多し。「宇喜多の末葉嶋産なり」で終る。奥書「明治八年十二月二日中邨元起校正 [印]」。内容は微妙にちがう。絵も山猫の絵など、他の本にないものあり。

⑥無窮会図書館神習文庫五八八八。写本一冊。白茶格子縞表紙、左肩打付書。外題「八丈志」。中表紙題・内題「八丈志」。二三・七×一六・九cm。一六行書。三八丁(墨付三七丁)。中表紙に「水野蔵」とある。「井上頼(圀)蔵」朱印。片仮名と漢字。「余八丈にありし時」で始まり、「余もよく知れり」で終る。末尾に「余十四歳の時」の一文あり。奥書なし。

⑦岩瀬文庫四五―一二。写本三冊。地模様入り紺色表紙。左肩子持ち梓白題箋。外題「八丈誌 上(中)(下)」。内題「八丈誌卷之上」。二七・四×一八・八cm。九行書。第二冊七二丁(「一 伊豆国ノ強氣ハオノレモヨクシレリ」。第二冊三二丁(彩色図のみ収録。八丈島・小島の図ノワウタキの図。山猫の絵はない)。第三冊四二丁(「イワコツコの図ノ此疾アリ」。中に「此島にバクト云疾ノ疑クハ脚氣ナラン」と朱で書

入れあり)。「岩瀬文庫」「読書室珍藏記」朱印。片仮名と漢字。奥書「嘉永七年甲寅五月写。平安読書室」。

⑧都立中央図書館東京誌料〇五五二―一六。写本四冊。朱色表紙、左肩白題箋。外題・中表紙題「八丈誌 上(上二)(中)(下)」。内題「八丈誌卷之上」。二八・七×二〇・一cm。朱少々。第一冊三七丁(「一、伊豆国」ノ「哀ニコソト聞エケリ」、第二冊三七丁(「一、家君常ニ云、島ノ言語」ノ強氣ハオノレモヨクシレリ」、第三冊三二丁(八丈島・小嶋の図ノワウタキの図)、第四冊四二丁(「イワコツコの図」ノ「多ク此疾有り」)。第一・二冊は文章、第三・四冊は画図が中心。漢字と片仮名交りの堂々たる美本。山猫の画図はない。奥書「嘉永七年甲寅五月写。平安読書室」。

⑨国会図書館八三四―四六。写本一冊。地模様入り黄土色表紙。左肩白題箋。外題・内題「八丈志」。二三・五×一六・七cm。一一行書。五〇丁。画図はなし。内容は「伊豆国」ノ「強氣は余も能く知れり」。奥書なし。

⑩国会図書館別置一四―一六。写本四冊。(マイクロフィルムにて閲覧。マイクロフィルム番号YDI―一七三、一四―一六、四〇六ノ七〇九コマ)。外題「八丈誌 元(享)(利)(貞)」。内題「八丈誌 卷之上乾(坤)(卷之中)(卷之下)」。第一冊四〇六ノ四八七コマ。「一、伊豆国」ノ「国言ニ訳スベシ」。第二冊四八八ノ五六〇コマ。「此島ノ草木、国地ニテ見ナレザルモノ」ノ「強氣はおのれもよくしれり」。第三冊、第四冊は画図(山猫の図はない)。

このように、かなり異なる体裁のものが多く、主たる内容は概ね同一だが、細かい異同も存在する。

八丈島や蝦夷の紀行には、豊富な画図を有するものが多く、その画図を本文中の該当の箇所挿入するもの、画図のみをまとめて別冊にするものとの二系統にしばしば分かれる。この紀行もそうで、⑩本のようにまとめて画図を別冊にする本と、②本のように画図を本文中に挿入する本の二系統がある。他に、⑨本のように画図を有しない本もある。

また、この画図も小寺応齋の「八丈島紀行」などの挿絵と重なるものもあるようであり、他の八丈島紀行との挿図の影響関係に関しては今後の検討を要する。

今、岩瀬文庫の一本に収録する画図を、掲載順に仮に名称を付して挙げておく。今後、他の諸本との比較検討を行う予定である。

- |                     |                   |            |
|---------------------|-------------------|------------|
| (1) 八丈島・小島          | (2) 西山・二ヶ村        | (3) 東山・三ヶ村 |
| (4) 家               | (5) 蔵             | (6) 婦人     |
| (7) 女               | (8) 婢             |            |
| (9) キフクロキセル         | (10) ハギ・ハゴイタ      | (11) (釣針)  |
| (12) ナタツ・オコシナワなど    | (13) ガリマサシ・コシヨケなど |            |
| (14) アシタグサ          | (15) 根            | (16) マヘンゴ  |
| (17) サツマイモ          |                   |            |
| (18) ハクサ・チフナ        | (19) (黄色い花)       |            |
| (20) キシヤナ・ノコギリシバ    | (21) マグサ・ノグサ      | (22) イワゴキ  |
| (23) イネラ二種 (赤ゆりか?)  | (24) ハマユウ         | (25) 瓜     |
| (26) エベズ            | (27) トウヨシ         | (28) マツバラ  |
| (29) サクダラ           | (30) ワロ (ヒロウ)     | (31) グミ    |
| (32) ナイシヤウグミ (つるグミ) | (33) サエマ          | (34) ワウタキ  |

## 二 作者

作者の大原正矩については、「国書総目録」の著者についてわかる限りは記したという「国書人名辞典」には紹介されておらず、経歴等が不明な作者となっているが、内閣文庫本「八丈誌」(上記の③本)に収録されている「八丈物語」の一文(他の諸本にはこの部分は存在しない)が詳しく述べているので、引用しておく。

大原陶太郎儀は父亀五郎飛騨郡代相勤候節、先代よりの引負金之儀、寛政酉年十二月御吟味之上遠島被仰付、其節依父之科中追放被仰付、当歳に付十五歳迄親類に御預に相成候而、於御評定所、大目付(桑原伊予

- |                          |                     |
|--------------------------|---------------------|
| (35) イワコツコ               | (36) クロバト・シヨバト      |
| (37) ネットカブナ              | (38) カツホドリ          |
| (39) シラブ                 |                     |
| (40) ワニザメ                | (41) ササ魚・アカ魚        |
| (42) ツノザメ・ソコザメ           |                     |
| (43) ヲコジ                 | (44) ブツチ・イソネズミ      |
| (45) ミヤコナダ・カワナダ・ナダ (蛇三種) |                     |
| (46) アシナガエビ              | (47) ヲダワラ           |
| (48) カテウ                 |                     |
| (49) クマノミ                | (50) チキリ            |
| (51) ハラフグ・トミ             |                     |
| (52) ツガネイハシ              | (53) ワコガリマ・ガリマ (かに) |
| (54) カメ                  | (55) ニシ・タバコ         |
| (56) イラカシ・カキ             |                     |
| (57) ヒラミ・アブキ             | (58) ツチコゴ・ウメイジ・セノカミ |
| (59) キコリタコ・カナガムシ         |                     |
| (60) ツボシマ・ハンバ・ホトケノミ      | (61) イケクモ・心太草       |
| (62) クロサイミ・ヲヲサイミ・シバアサキ   | (63) 小島             |

守」申渡、伯母婿〔御書院番松野右京〕江引取節、養育請罷在候処、成長致、父遠嶋に罷在候間、何卒父江附添、先途見届度旨親類共江朝暮申聞候処、一類共相談之上、享和戊年三月父之配所江罷遣被下候様〔松野右京宛熊谷長十郎より〕奉頼候処、同年五月願之通に者難相成、併右嶋江相越候儀は御構無之、尤父同居追而出嶋之儀も勝手次第たるべき旨被仰渡。依之八丈嶋江同五月廿五日乗船仕、同年十月七日八丈嶋へ着岸仕。其間海上風波難洪之儀筆紙に難尽事共之。擬父同居附添介抱仕罷在候処、同三亥年七月晦日中追放之処

若君様〔内府家慶公〕去ル丑年御誕生御弘相濟候御祝儀之御教に 御免被 仰付候旨嶋役人より申聞御当地にては大目付〔井上美濃守〕於宅親類共江申渡有之、右之通、陶太郎江は親類共より御書状申越候。然る処出嶋不仕、父介抱仕罷在候処、文化八末年

憲廟百回御忌御法事有之候節、父亀五郎儀、御救被 仰付候に付、父子同船にて同年七月八日江戸着仕同月十八日町奉行〔永田備後守〕於役宅陶太郎江被仰渡候は先年父亀五郎不届有之遠嶋被 仰付八丈嶋江被遣、其方□□右嶋江罷越候処、此度出嶋着船致候間、松野長十郎〔右京子〕江引渡候段備後守申渡、引続長十郎厄介にて罷在る節文政七申年六月十九日被為 召登城仕候処、先達て父亀五郎に附添配所江罷越多年之在嶋中并其後も孝養行届候に付被 召出御切米百俵被下置、小普請入被申仰付候旨於躰躰之間御老中大久保加賀守殿被仰渡、岡部因幡守支配江入、久世伊勢守支配之節同十一年八月廿一日

御目見仕其後高月丹波守支配之節天保三辰年九月十八日被為 召小十人組江御番入被 仰付候旨御老中御列座水野出羽守殿被仰渡候。

これによると、正矩は陶太郎と言ひ、父の亀五郎が遠島になった後、

願ひ出て自らも島に渡り、赦免にあうまでほぼ十年、父と島で暮らしたことになる。

なお、「寛政重修諸家譜」の大原氏の項（巻二二八九。清和源氏支流・大原。「統群書類従刊行会本」第十九、三三七ページ）に次のようにあって、父正純が問われた罪状もやや詳しくわかる。

#### 〔「寛政重修諸家譜」の記事〕

大原 彦三郎某御徒にめし加へられ、男彦八郎某がとき、外家の号高田にあらため、紹正にいたりて大原に復し、正純がとき罪ありて家たゆ

●某 彦八郎 御徒をつとめ、のち組頭となる。――紹正（略）

――正純 初正躍まさなり 勝三郎 亀五郎 安永七年八月二十一日父が職務を見ならひ、天明元年七月八日遺跡を継、二年十一月二日父に代りて飛驒の郡代となり、布衣を着する事を聴さる。のち御勘定奉行支配の無役となり、寛政元年十二月二十五日父紹正職にあるのあひだ負金許多ありて正純にいたりても其償滞るのみならず、不相応に手代を減じ、をのがれ職務をもかれらにのみうちまかせ、農民等より金子を借受、または年税のあまりをも割あたへず、私曲の所為多かりしをもしらざりしこそ其罪軽からめといへども、これを宥められて遠流に処せらる。妻は町野舍人清謂が女。――正矩 陶太郎 寛政元年十二月二十七日父が罪に坐して放逐せらる。

この家譜の編纂時には正純の時に大原家は断絶したとあるが、上記のような事情で正矩の孝養が認められて家督を継ぐことが許されたようである。それについては、これも内閣文庫③本の末尾に関係文書が「大原陶太郎行状書之写」として収録されている。内容は概ね上記の資料と重

複するので全文は紹介しないが、正矩と父の島での日々の苦勞がしのばれる部分もあるので、抜粋しておく。

同年十月七日八丈嶋江着仕、父之在所を相尋、一同相悦同居罷在候処、極難之嶋方、私方より年々少々宛之米穀見繼遣候得共、金錢通用無之、朝夕暮方一式穀物にて相調候。土地柄之義故、米穀甚払底にて常々穀物差支勝に付、難儀仕罷在候処、文化元子年私方（この文書を書いた松野長十郎。「八丈物語」のいう伯母婿の松野右京か）とより差遣候穀物積入候船、同年八月八丈嶋湊口にて破船仕、右穀物不殘捨荷に相成給物一切無御座、別て難儀仕候節杯は、陶太郎も平日懇意之者より少々之穀物等借入、父亀五郎江は粥等にいたし為給、陶太郎儀はあした草と申者の葉江麦を入并芋大根類等食事に仕候得共、夫さへ心に不任候間、猶又心配仕、其後は父介抱之間々見合、嶋方にて身元相応之者方江便り、八丈縞産物売、反物下帳書留等手伝、其外小間懸杯致し遣し、右の処にて下男同様之極（亀）食にて露命相繋、宿元にて食事不仕様心掛、父江は彼地にては相応之食物為給、且又父平生魚類相好候故、嶋方之荒磯難所遠方を不厭、罷越、魚類釣取為給候得共、酢醬油なども無之土地故、炙又は塩煮杯に致し候故、父数寄に叶申間舗と相嘆候由。魚猟多き節は父江為給候残は穀物に交易仕、或は磯草貝類等取来。風雨等強く海辺江難出節は山中江罷越、あさみあしたの草葉其外食物に可相成品摘取、朝夕食事に交ぜ物にいたして成丈ヶ私方より見繼候穀物は貯置、父飢渴に不及様心掛、朝暮心を尽し無論□仕へ居在候に付、亀五郎も右艱苦を不便に存、且は孤嶋之辺鄙村方百姓之下部同様にて一生相果させ候を一入（ひとしお）嘆ヶ數存、先年追放 御免之身分にも候上は出嶋仕、御当地にて見繼物等世話仕、其上学問手跡等も稽古仕、人となり候様、申間候得

共、陶太郎儀、父先途見届申度存込相願、彼地江罷越候上は此後如何様之艱難仕候共覚悟之義にて、出嶋之心底毛頭無之旨申聞、只父手元に罷在、安否見届罷在候義難有存、手跡之義は其以前出嶋 御免御座候柳田□之助と申者在嶋之節、貫請候手本相習、素読并算術は父亀五郎に相学び稽古仕候由に御座候。其後文化六己年八月廿三日陶太郎も居村名主出府留守中売反物下帳書留等之儀相頼、右之者宅江罷越候処、同夜五ツ時頃南風吹出し大風に相成、亀五郎居宅南方はかけ払之場所にて別て風当強く殊に流人之居宅之義雨風を凌候迄之家居故、無心許其上父儀其砌足痛にて歩行仕兼罷在候故、陶太郎儀差急ぎ走帰り父江氣力相添雨戸を押へ相防候江共、嶋方大風之義は中々言語に絶候儀にて、風勢益強く相成、雨戸吹放し迎も家居難相保体故、亀五郎を背負、風陰の百姓家江漸々立除候由。其節陶太郎不居合候はば亀五郎足痛之砌、暗夜の大風立退候程之義は如何様の怪我可仕哉も難斗。陶太郎附添候甲斐有之候迎亀五郎も相悦申候由。

陶太郎の孝養を賞賛する文章であるから、やや美化し誇張されているかもしれないが、父子の日常がよくしのばれる記述である。

### 三 内容

先に述べたように、諸本にやや異同はあるが、どの本でもおおよその内容は一致する。項目をたてて、八丈島について記しており、その項目に沿いながら内容を挙げると概ね次のようになる。ここでは国会図書館本（⑨本）によっている。

- (1)島の位置、地形、歴史 (2)港、漂流、大風  
 (3)季節、クリのことなど (4)津浪、噴火 (5)孤島、港、岬  
 (6)海産物、トコブシなど (7)漂流船、温泉 (8)川ナダ  
 (9)大邑のこと、神社 (10)コッコ(アカハラ)鳥  
 (11)女性の生活 (12)船の旗印、ナラヒ風 (13)染物  
 (14)男女の生活、女性の姿 (15)夫婦生活、家族生活、冠婚葬祭  
 (16)痘などの病気 (17)踊りを好むこと、鳥の歌、恋の伝説  
 (18)草木、鳥、小動物 (19)毒茸のこと (20)牛、山猫、鼠  
 (21)鯨の声、島の言語 (22)女の嘆き、煙草のこと  
 (23)十四歳の時の島への渡海 (24)船頭権右衛門のこと

読み物として最も面白いのは、ここで私が仮に(23)(24)として挙げている二つの挿話である。ともにかなりの長文であるが、そのまま紹介しておきたい。

まず、正矩が父と暮らすために島に渡った際の渡海の記録である。風向きが思わしくなく、海岸線を彷徨するありさまが、細かく綴られている。

余十四歳之時、享和二年戊戌年八丈嶋江渡らんとて皐月末の五日江戸川を出帆して同晦日に三宅嶋に着。夫より風待して文月の八日、暮頃より船出して追風にまかせはしらせける。余は船にあふ事人より猶まさりぬれば、日暮るやいなや船底に打臥たり。やがて目覚めればかたわらなる人に問ふて言けるは、「船は今程は十里や行けん、廿里や走りなん」と云けるに、人の答けるは「船は御蔵嶋を過し比はよきナライ(北風)なりしも、俄に〔坤未申、ナガシトカ〕いふ風になりて八丈江はいかでか

行事を得んとて、船は伊豆国下田の湊をさしてかへすなり」といふ。去るにても此月頃待詫し甲斐もなくと思へば、ふたたび問ふべき言葉もなく、又のかたへに打臥けり。

兎角するうちにはや東雲程近くなりぬれば、汐風殊によからずとて漸々にして相模なる三浦みさきと云所に船をつなぎける。夫より「ここ」の湊に五日かしこの浦に七日といったづらに月日を送りけり。斯て後もまた追風よしとて八丈をさして船出せしが、せらる風とか云て北より出る雲は南の雲にささえられ、南より出る雲は北より運ぶ雲にささえられて海原は春の青野にことならず、いかでやたけにわたらすべき、いづくに船をよせんにも風絶てなきことなりせば、船は次第に汐にひかれ行く。

ひと日ふた日が間嶋山を見請しが、五日と過ぎ六日となりてはいづこ何地と知れずして、只汐にのみひかれてあしたは東へ流、夕べは西へただよふ心ぼそさ、いわんかたなし。帆は、檣にまどる付、楫の音ならではねむりをさますものもなし。或はこしかたを思ひ出し或は行末を思ふ人心皆同じかるべし。只打寄て月日をかぞふるのみなりけり。あくる日の事なりき。俄に雲おおひかかるに船子共あわただ敷「帆をさげよ」など云間こそなけれ、一しきり(棟)の風来るやいなや帆檣は只弓を引きしほりたるごとく、今やくつがえらんと思ふに流石に船子には帆をひきまゝとめてぞをろしけり。人々は魂もぬけ出ぬる程のこちにてもあまりのことに涙さへこぼれざりけり。其夜も子の刻や過なん、丑みつにやちかからんと思ふ比、しきりに船の汐にもまると覚へし。何とやらん船子のひそひそとささやくにも、我も人もをもきかうべをもたげて「何にてやあらん」と言に、一人のいへるには「今宵はあやかしの付て船ことさらに汐にもまるるなり」と云。余、「あやかし」と云事はかつて知ら

ざりければ、ただふしぎ重なるのみなり。

程なくあけ近き比、船もうごくさまなり。人々も又物語などするにつけて、傍に臥たる人々に問ふに、凡古へより大海に乗しづめ又くつがへりし船いくばくなり。其霊のとどまりたる所に到るときは必しもけうなる事の有る由なり。是をさけんとならば、或は桶又は樽の類そこなき物三つ四つ流しやる事古へよりしかりとぞ。是を「あやかしの付きたる」と云。斯言を聞ては物凄くかつ心ばそさいやましける。あくる日も猶四海風（ナギ）わたりて、目にかかる物とはなし。数日の船つかれにやうつうつと又眠りに付しに何となく船中さはがしう驚きて目覚めぬるに人々物云はでただ船櫓あるひは船ばたなどによらずたき、どろどろとうちならず。我も人も様子知らざれば「又もあやかしの付たるか」とふたたび魂を失なひぬる。なれども「夜中こそさもあるべきに昼も猶四方晴わたりたるに何とてかくはあらん」と思へるに傍の人しきりにももの言ふ事をとどめける。されども何とやらん心ちおちつかねば又もかうべをもたげ、かなたこなたと見てければ、小山のごとき黒き者船のあなたにあらわれたり。これなん鮫の魚のひれなりと云。もし船に付く時はいかで其俵のがるべき。あやうき事いふ斗なし。

これよりいづ（伊豆）の湊に入らん、陸にや付かんと、今ははや物くふことさへせざりけり。斯数日漂流しては只水をのみたくわへんことをむねとするゆへ、かつするとてみだりに水をあたへざりけり。たまさか赤き椀にくみもてくるを五人七日として争ふごとく也。只夢にだも流川などに臨みても淵深ふしていたづらに詠め居ると見ては夢さめぬ。ややもすれば人々の咄もただくだ物のみなり。斯月日を送る内秋もはや長月末となりけり。長き漂流なれば身のやつれもいやすのみ之。起臥も人に助けられてのみ漸這出て漂々たる洋中に向ひ、只泪こぼるるばかり

也。

かくする内、ある日のことなり、遙に雲の絶間に国地の山とも見へ又嶋山とも見へて次第に近づくやうなり。此時に至りて我も人も生出たる心地して、ややはい出て綱にすがり櫓にそひて只上陸をのみ祈りける。斯する内船主湊近く江と流れ寄るに舟子らも数日の漂流にくるしみ水さへ尽ぬれば、ここの湊に入らんことをのみ斗ける。船長の言けるは、「茲は房州小湊にて、ここへ入らばいたづらに今年を過さんことよふなき事也。水もいまだ尽しにもあらねば、今宵を明し何国の浦にもたより一日二日を過しなば又も追風のあらん」とて、さらにいらへもせざりけり。とかくする内日も暮行程に誕生寺とかいふ寺の燈もさながら手に取るべき程に近よりけるを船長のあらけなる心より次第に舟をもどしける。人々は昼のよろこびに引かへてをのさまざまに打臥けり。さすがに此湊をはなるの心ばそさ、いつしか誕生寺の燈火も波にかくる哀さ、今さら筆にあらわし尽し難し。とかくする内一頻のふりくる雨にたちまち数十丈の荒波船をもてにおほひかかる。船子等を初めあはてふためき帆を下げなどして力の及ぶだけ働けども、其印なく次第にうつまく波風に今は船もたちちがたくぞ見へにけり。船長の言けるは「斯てはとても可凄様なし。いざや人々船あしをかるくして一浚せばや」と云。我も人も嶋へ渡りての命をつなぐ種となし置たる米麦或は味噌塩の類迄も皆海のもくずとなさん事の、さりとて力なく思へどもせんすべなし。「たとへいくばくの物捨るとも命さへあらば」などと色々に思ひかへ、さて見るにつけても「きのふ小湊に船懸りせば、斯までになり行ことはあるまじ」と、只船長をうちうらむる斗り也。船の表にうつ高く積なしたるあまたの俵も今ははやさしのぞき見るばかりにはね捨けり。なれどもいかにも四方波とか云にて南より北より東より西よりとおそひかかる荒波に

櫓迄も伐捨けれ、波は次第にをこり立、船中の人々或は大山にも登る如く思ふに忽ち千尋の底に落入るごとく其度々腹をたつの思ひ也。

船子等の言けるは、「人々よく聞給ひね。過し七月網代を出しより斯迄に永き漂流に或は風を凌ぎ或は雨をしのぎて、けふまでも人々と共にくらせしが、是も世に云一樹のやどり一河の流れにも増るべし。とても凌ぐべきやうもなければ今は是迄と思ひ定、我々と共に此大海の水くずとなりて復の世にこそ樂し給ふ」など云をきくにつけても我が輩はただ打臥てのみありけるは、さは云ものの「かかる時を人々髪をきり是に一刀を添て水中に入て神に祈る事古へよりならわしなり」とて人々の髪を切て水中に納めたり。今とりわけ波も高く船を打越し打しづめするに今こそ砕くと思ふ事度々なり。楫をそこね船底をいためける故あかの道しきりにて是を汲人力も尽果るばかりなり。斯する内神仏へのいのりや届きけん人々の運尽ざりけん、少しづつも波たいらぎ風やみて暁となり行に船子らの云けるは「人々悦び給ひね、今は是にては何ともして凌ぐべく思ふ也。船中つつがなきこと此上なし」と云。我輩も今の言葉を聞く迄は「とてもいくべきにあらず」と思ひければ、心の定りて泪さへこぼれざりしが、かへつて船つつがなしと云を聞て又も行末をあんじ、こしかたをおもふ身とはなりたり。

やうやう日の出るにしたがひ四方も風わたりけり。先づ命をまつとふしたるやうなれども楫を傷めける故、いつこをあてとなくただよひ流るのみ之。櫓なければ帆をあぐる事もならでやうやうや帆とか云にて少しづつも国地のかたへはしらせける。

斯て後、又も三宅嶋に着く。ここに月日を重ね楫を直し櫓を入て神無月初めの五日ここの湊を出て明日六日は八丈へ近づけるなれど風風雲雲おさまりて既に日も西に落らんとす。人々は「今や嶋より引舟の出る

や」と待程に岸打波も白帆かとうたがわれ、「螺の音をたて引舟を呼ん」と取出し見るに、さいつ比いためたるにや、さらに其用にもたらず。人々は身をもだへ手を打ならしなどすれども一里余も隔りたる嶋が根へいかで届べき。今に至りては笑ふべきことなりし。又「竹の節をぬきて三四尺にして吹時は螺の音にことならず」と云者あり。あわたたしく大竹をきりて二三本も筒先を揃へ息を入るに只心せく斗りにて何の音も出る事無し。かくする内日もくれ行程に嶋<sup>ネトラ</sup>にかへる鵜の鳥の幾羽ともなく嶋山をさして飛行を見るにつけても泪こぼるる斗り也。程なく神湊に焚く篝火に合の火の手は一枚の苦にうつせし火にて力と思ふ篝火も今は遠くなり行に夜は次第に更渡り船は汐にぞ引かれ行。なれどまたも人々の運尽ざりけん、暁となりて汐風共におだやかにて嶋が根へこそ近づける。斯て嶋はさらなり小嶋よりもあまたの引舟出るにぞ今ははや人々の心も浮たちて初て笑ひも出にけり。斯する内船より小綱一筋小舟へ打入るといふや、数多の小舟その綱を取りて一同に八重根をさして漕出しけり。時もうつさず此湊に入れば、嶋長の差図につき我も人も磯辺の小屋へぞ揚げける。

因に言。余が輩斯迄に難風に逢しと云も畢竟船頭の舟手に覚へある者故なり。並々の舟頭なりせば、数日の漂流にくるしみ且水も尽しなれば房州小湊に入、たとひ月を重ね年を越すとも数日の船つかれをも治すべきに、乗組の意をもかなへず小湊に入らざるは舟頭の強気故にて諸人のなげきを引出せり。

これを見てもわかるように、正矩の文体は優雅な和文ではないが、めりはりの強い俗文というほどでもなく、率直で親しみやすいが、穏やかで冷静で品位がある。あまりこれといった特徴がないのが、時にやや淡



白で平板な印象も与える。おそらく実直で謙虚な人柄が反映しているの  
であろう。

それでも最後にやや恨みがましく書いている、強気な船長権右衛門に  
ついての伝説めいた逸話が次の話で、この船長を賞賛する話をここにつ  
け加えるのも作者らしい配慮なのかもしれない。

余、八丈にありし時、六拾に余りし人のひとり暮して朝夕のけぶり細  
く月日を送りしが、彼が荒たる小屋に明暮人々の集り物語の折ふし、此  
船頭のはなしする人あり。むかし三宅嶋に権右衛門とて大胆不敵の者あ  
りしが、船乗修行の爲とて、余国の船に乗り所々漂流して大難風に逢し  
は丑の刻と覺しき頃、いずこの山ともしらず、既に船は岩根に押よせ暫  
時に碎くるばかりなり。其時権右衛門、乗組一同に向ひいふ様、「人々  
にはこの山をいづこと見しや。斯岩根ちかき波音するはまさしく一時一  
崖へ押寄ると覺へたり。もはやいかがしても助るべきやうなし。我は土  
佐路の磯なるべく思ふなり。此先にわづかの砂浜あり。是、我昔此地に  
漂流せし事あり。今、我に各の一命を呉まじきや。さすれば若（もし）  
も一命の助ることもあるべし。いかと思ふや」といふ時、乗組の者、船  
頭に向ひ云様、「我々、船の渡世するからは船を枕として死すること、  
もとより覺悟なり。何ぞ聊（いささか）心残ることあらん。いかが共親  
方の思ふままにしかるべし。若（もし）夫（それ）にて命助からば、是  
親方の働といふことなり。我々は、とても一命助ることは思ひもよら  
ず」と云。其時権右衛門いふやう、「乗組の内、若手目の達者なる輩は  
我側に來りて是を見るべし」と薪を三把取寄、彼闇夜波のさかまく海  
中へ二三本つつ投込、暫くしていふやう、「人々、いかが見しや」。皆い  
ふやう、「薪は一本も残らず岸の岩根に寄ると見へたり」と云。権右衛

門「はや我いふ砂浜近し。波音やわらかにして、船に答へたり。今こそ  
能時」とて解（トキ）をおろさせ、「人々、大椀盥（つづ）持、衣類を脱  
捨、海中へ飛入り各船べりに手をかけ舟の中へ入るうしほを汲ながらゆ  
くべし」と下知して其身も海中へ飛入たり。人々命限りと舟へ打込む潮  
を汲すて汲すてゆくほどに、しばらく有て波のさかまくことしきりにし  
て既に砂浜へ舟とともに残らず打揚たり。其時人々多くは氣を失ひしと  
かや。ややあつて夢の心地して人家を尋ねて其夜をあかしけり。船乗な  
どは斯の如く一度見たる所は後々までも忘れずして終に大難をのがれた  
り。しかれども薪を流し汐の地方へよするか沖へ払ふかを試みしことな  
ど、よの常の船乗の及ばざる所也。又権右衛門十八九歳の頃、余国の船  
に乗、漂流して日本の海とも覺へず、数日のうち嶋山をも見ず流れたり。  
権右衛門、其船の船頭に向ひていふ様、「いかに我、今日は嶋山近しと  
覺へたり。人々心強く思ひ給ふべし」といふ時、船頭答ていふやうは、  
「我、数年船の渡世してさへ昨今の漂流は日本の海といふこともかつて  
わからず。まして嶋山ちかきなどとは、おのれ若年の身として何をか知  
るべし。いづこの雲を見てかくは申なり」といふ時、権右衛門、船頭に  
むかひ云やう、「親かたには潮の味ひ、いかと思ひ給ふや。我きのふ潮  
を含み見るに、其味ひ苦み強くして悪る辛く、是嶋山百里を隔つと覺へ  
たり。今ふくみ見しに昨日とはことかわり、其潮苦み少なくて、おの  
づから味ひあり。是草木の蔭ちかきにあり。さすれば国地また遠かるま  
じ。空晴なば夕がたは其しるしあるべし」といふ時、船頭しばらく考へ  
居しが、「汝は過たるものかな。我かつて氣もつかざりし」と、はやく  
も潮をふくみしに、権右衛門がいひしにたがわず。其時、船頭、権右衛  
門にむかひ、「汝末々に至らば、汝が右に出る者、又少なからん。すへ  
たのもしきものかな」と殊に賞美せしとかや。此権右衛門、中老の頃、

余が八丈しまへわたりし時の船頭なれば、渠（かれ）が強気は余も能く知れり。

「八丈志」の中では、この二つの話以外は、淡々としていて、行き届いた丁寧な調査報告ではあるにしても、面白さや迫力にはやや欠ける。ただ、しばしば登場する「家君」こと父正純の発言が敬意をもって書き留められており、またそこにかがわれる父の面影もおおどかで落着いた幸福そうな雰囲気をもたらしているのが、この作品におのずから暖かさとするさをもたらししている。以下にその部分を引こう。

麦多くは秕となる。俗に是を「ヤワツにいりし」といふ。麦の実寿黄交りし、画る矢の羽に似たるゆへに、やはづを訛るなるべし。筈と羽と二物といへ共中州の人も梶原が紋を矢筈といふ者多し。「或は青きがうちに（画示）如此黄になる故矢筈といふか」と家君云。

因云、或時家君、矩（作者）に語て曰、「鳥民の茅屋を穿つ鳥あり。是をコツコ（中洲のアカツハラなり）」と云。年によりて夥敷茅屋を損ひ、修葺せざれば漏湿に堪へざるにより、土俗是を休福の霊といふ。蓋大俗の意、休福は身縉紳出ては将師たり、入ては国侯たり。一旦罪を得て遷客となる。生前まさに不満たるべし。故に死後鳥と化して民屋に害をなす。夫小鳥の人屋を穿つは虫を取て餌となすなり。詩曰『誰謂雀無角何以穿我屋』と。召南の雀も亦無乃殷人の霊か。笑ふべきの甚敷なり。余、休君の為に冤を雪ぐ」と仰られし。

家君、赦に遇ふて余と共に帰る。人の問ていふは「嶋に美女多し」と。

家君笑ふていふ、「無塩も亦多からずとせず。但国地の人にくらぶるに、面より顔まで、きめこまかに覚ゆ。故に孤嶋の産となしては美なるようなり」。

家君いふ、「嶋の婚姻は国のわたまし（転居や新築の祝い）に似たり」と。小豆粥をするゆへなり。

家君常に云、「嶋の言語の訛りであること、更にいふべくもあらねど、甚佳なる詞も多し。辺地の言語とて笑ひがたし」。

家君の村童に素読を教ゆる時、嶋言を国言と華言とに訳してきかせらる。アンノゲンザリは、国言「何しにさうであらふ」。華の「豈其然乎」。

煙草のことにつきて亦一笑あり。元佐渡の国の村長何某、罪あつて配せらる。在嶋頗久し。農業に委しく、且少（すこし）く家富たり。或時余が茅屋に来て、家君に謂云、「諸船来らざるが故に煙草を得ること難し」と。依て煙草を乞ふ。家君の云、「予が家、嶋の煙草最乏しく、所持する物、皆国地の煙草のみなり」。何某云、「其国地の煙草を望むゆへなり。嶋の煙草を以て酬ん」とて持去たり。家君思へらく、「何某国地の煙草を好む者あらず。何がゆへに乞求るや」と少く疑心を生せられたり。其の後旬ならざるに、上浦なる山下何某（嶋の長也）の方に至り給ふ。其時何某の妻女、家君に煙草を乞ふ。則、煙草入のまま出し給ふ。忽妻女是を吞て大に笑みを含み、「是なり」と独言して煙草を其俵戻す。是に於て家君其故を問給ふ。妻包まずして謂ていわく（後略。結局何某

は、志摩から来ていた流人の樹々<sup>トキ</sup>という女に、煙草を贈っていたことがわかって大笑いになる。

最後の話などは特にそうだが、父が登場する部分は精彩がある感じさえする。そして、ここに登場する父正純の姿は、島の子どもたちに学問を教え、落ちぶれたのを恨んで鳴くという啄木鳥の伝説を笑って否定し、闊達で悠悠自適の印象がある。実際にそうであったのか、敬愛をこめて綴った息子正矩の心がこもるのか。流罪にあった悲壮感や寂寥感は皆無といってよく、犯した罪への反省も、受けた処罰への不満も抗議もまったくない。

正矩が生まれた年に父は流罪になった。顔も姿も記憶のない父とともに暮らしたいと望んで十四歳で島に渡った少年と父が、どのように再会し、その後の暮らしの中で父の犯したとされる罪について何を語りあったか、あるいは何も語り合わなかったのか、「八丈志」は記していない。流人たちが記した八丈島紀行の多くは、赦免にあって帰郷後に完成している。記した記事の内容は在島の間の見聞を記録したものであっても、作品として完成させる時点では彼らは島を離れており、苛酷な日々の思い出も過ぎ去ったなつかしい苦勞として美化される傾向がある。この作品にもそれがある。島の記録を書くにいたった最大の原因である父の罪科と処罰にはいっさい触れないままであることが、この作品に深みや鋭さを生まなかったといえればそれも正しい批評である。だが、この作品全体に漂う、しなやかな毅然とした清々しさは、在島間の辛苦をまったく語らずに、ややユートピアめきさえする一つの異世界として島を観察表現し、その中にひとつの理想としての父の姿を確実に刻みつけて後世に残した作者の姿勢の結果ともまた確実に言えるのである。

## 1 註

寛政八年。緑地社刊の活字本があり、金山正好氏の詳しい解説を附す。

## 2

拙稿「島の生活」(「江戸の旅と文学」ペリカン社刊)を参照されたい。